

2025年 6月21日(土) 13:00 開演 (研究イベント第1部)

世田谷美術館・講堂〔入場無料〕



申込公式サイト

文明評論家 川添登



Photo: Yukio Yanagi

その足跡と人物像をかたる

川添登 (1926-2015)

建築評論を基盤にしながら、都市、芸術、道具、デザインを通じて文明の本質を読み解いた知識人。戦後日本におけるモダニズムや近代化に批評的視点を持ち、生活文化や空間の意味を文明論的観点から論じた。道具学会の創設にも関与し、人間とモノの関係性を通して文明の構造を考察。建築を超えた多分野にわたり、多くの人々に思想的影響を与えた、稀有な評論家である。



道具学会の設立に貢献された川添登氏は、道具を文明や文化の表象としてとらえる思想的枠組みを提示し、学会の理念形成に大きく寄与されました。今回のレクチャーでは、2名の若き川添登研究者・信奉者からお話を伺います。川添氏を建築評論の枠を超えた文明批評・文化論の視座から研究する「木原天彦氏／松濤美術館」と、川添氏のメタボリズム運動を取材しその思想と人物を信奉する「磯部孝文氏／GK設計」のお二人です。会場を含めた討議のモデレータには、学会設立当時の川添氏を知る、面矢慎介 当会副会長が担当します。没後10年となるこの節目の年に、川添氏の功績を偲び、その精神を再確認する貴重なレクチャーです。

講演者1 木原天彦 (きはらあまひこ) 渋谷区松濤美術館 学芸員

講演者2 磯部孝文 (いそべたかふみ) 株式会社GK設計 シニアディレクター

モデレータ 面矢慎介 (おもやしんすけ) 滋賀県立大学名誉教授 道具学会副会長

● 講演者からのメッセージ・略歴

木原天彦：

文明論之概略 ----- 川添登の場合

川添登(1926-2015)は戦後日本において極めて独自の活動を繰り広げた評論家です。児童教育、建築、芸術、都市、民俗学、生活学とフィールドをめまぐるしく横断し、常に文明論的な視野から人々の生活について考え、そのゆく先を見据えるダイナミックな議論を展開しました。菊竹清訓や栗津潔、榮久庵憲司など数々のデザイナーと協働して、理論と実践を架橋したこともまた、特筆されます。今回の発表ではいくつかの彼の著作や実践をもとに、川添登の「領域横断性」と「文明観」を紹介しつつ、彼がデザインに託した思いを読み解きます。

現代において「文明」を語ることはどこか後ろめたく、ともすれば深刻な差別意識を生み出すか、怪しげな誇大妄想に陥る危険性すらも含んでおり、とても厄介なものです。そこでこの発表では、「文明」を自明な存在と捉えることは避け、むしろ「文明」を語ることで川添は何を成し遂げようとしたのか？それは日本の「戦後」といかに共振していたのか？という問いを掲げ、歴史学的に考えることを目標とします。



きはらあまひこ

1992年東京生まれ。東京藝術大学美術研究科博士後期課程。2019年より渋谷区立松濤美術館学芸員。専門は日本近現代美術史、とくに前衛芸術・建築と生活文化との相互浸透について関心を寄せ、今和次郎や白井晟一、川添登についての調査研究に取り組んでいる。川添に関する主な論考に「川添登の白井晟一論とその背景 1950年代における建築家の主体性の確立」（『白井晟一入門』青幻舎、2021年）、および「川添登研究の方法的課題」（『渋谷区立松濤美術館年報26号/紀要1号』渋谷区立松濤美術館、2024年）がある。

磯部孝文：

「METABOLISM Report ～ヒアリングによる時代の記録～」から

昨年、川添登先生のご子息より、先生が当時仕事場で愛用されていた「イタリア製の木製の大きなデスク」と「イームズの黒い革張りの椅子」をいただくことになった。その不思議なご縁に、私は歓喜した。遡ること約23年前、22歳の大学生だった私は、ある興味から卒業論文で川添登氏が中心となって結成したメタボリズムグループを題材とし、55歳差の先生に学生特権で無謀にも仕事場に押しかけヒアリングを敢行した。ファーストコンタクトは最悪だった。「君はメタボリズムの何を知っているのかね。」先生はお会いするなりイライラした口調でこう言われ、まだ何者でもない私に強烈な一撃を喰らわせた。

その後、今になりなぜ私のところに机がくることに至ったか……今回は、その後も何度かお会いすることになった“祖父と孫”のような出来事を振り返り、メタボリズムのこと、川添登先生がどういう人物であったか、直接お会いした経験をもとにお話したいと思います。



いそべたかふみ

1980年名古屋市生まれ。滋賀県立大学環境科学部環境建築デザイン学科卒業、滋賀県立大学院博士前期課程修了後、2005年に株式会社GK設計東京事務所に入社。卒業論文で『メタボリズムグループ』を研究対象とし、川添登氏を含む当時メンバーの多くに直接ヒアリングをした「METABOLISM Report」をまとめる。修士論文では『道具論』を研究対象とする。現在は、パブリックデザインに関わる仕事を生業とし、「動く」ストリートファニチャーのデザインを生きがいとする。GK設計 関西事務所勤務シニアディレクター、大阪事務所所長兼務。